

## 第2章

### 新聞における科学記事

保坂 直紀

hska0100@yomiuri.com

読売新聞東京本社科学部記者

#### プロフィール

1985年、読売新聞社入社、東北総局(仙台)に配属。警察回りなど、地方記者として活動を始める。つくば支局時代に、科学についての取材を本格的に開始。その後、東京本社科学部に配属され、富山支局などを経て、現在に至る。雲仙普賢岳の噴火、気象、地震、宇宙など幅広いテーマを扱う。著書に『謎解き・海洋と大気物理学』(講談社ブルーバックス)、『図解雑学 異常気象』(ナツメ社)など。専攻は海洋物理学。

#### はじめに／講義の問題意識とポイント

新聞はどのような特徴を持ったメディアなのか、そこに掲載される科学記事はどんな性格のものなのかという点について、新聞を作る側と読む側とに認識のずれがあるように思う。そのずれをもっと小さくするために、新聞はどのように作られるのか、特に科学記事は新聞の中でどのように扱われ、どのような過程を経て掲載されるかについて話してみたい。新聞がきちんとした批判を受けて、よりよいものをめざすために、新聞とはどういうものかについての認識を、新聞を作る側と読者の側、取材される人とも共有していきたいと思う。

最近、「日本は天然資源がないので、これからは科学や技術を重視していかなくてはいけない」とか、「科学や技術は社会にとって大事だから、理解を深めなければならない」という声が大きくなっている。それにともない、科学や技術の発展のために新聞はもっとがんばってくれという期待の声もあちこちから聞こえてくる。これまでのメディア研究によると、テレビや新聞が伝える情報と、人々の行動の変化との因果関係は不明という見解が通説になっ

ている。にもかかわらず、社会に科学を伝えるために新聞に対してがんばってくれと言われるのだが、どこをどうがんばればいいのか。さまざまある新聞批判を突りあるものにするためにも、新聞の内側を知ってもらいたい。新聞のほかにもテレビ、インターネットなどさまざまなメディアがあるが、新聞ならではの長所や限界もきちんと話しておきたいと思う。

## 1. 新聞の中で、科学記事はどのように扱われているか

### 1.1. ノーベル賞ダブル受賞の当夜の科学部

新聞の中で科学記事はどのように扱われているのだろうか。2002年の秋、ノーベル物理学賞と化学賞を日本人2人が続けて受賞したので、当時の読売新聞の紙面を手がかりに考えてみたい。考えるポイントは、記者がどのように取材するのか、そして、書かれた科学記事がどのような過程を経て紙面に掲載されるのか、その2点に集約できる。特に、記者の意見や見解が必ずしも新聞の紙面に直接反映されるわけではないという点を強調しておきたい。そこに、新聞の1つの限界を見ることも可能だろう。

ノーベル財団が受賞者を発表するのは、例年だいたい午後6時45分ごろ。予定時刻からずれ込むこともあるが、この年は予定時刻どおりぴったりに発表された。世間ではマスコミだけ特別扱いされ、情報を先にもらっているのではないかと誤解している人もいるが、実際はそんなことはなく、扱いは平等である。発表の時刻が近づくと、都合のつく科学部員は極力会社にいるようにして、自分のパソコンをノーベル財団のホームページに何度もアクセスし、今か今かと発表を待っていた。インターネットが普及していなかった時代は、APやロイターなど外国の通信社が配信する英文原稿が頼りだった。その原稿では国籍、名前、業績など、分かった情報がその都度小刻みに入ってくるので、その度に外電が入ってくる国際部と科学部との間を若い記者が走り回ったものだった。受賞者が日本人なら社内も大騒ぎになるが、日本人以外なら短めのニュース原稿を作るだけで、通常の仕事の範囲だ。

ノーベル財団のホームページは簡略版と詳細版と両方用意されていて、よ

くまとまっていて分かりやすい。といってもすべて英語で作られているので、日本語と同じ程度に英文を読む記者ばかりだといいいのだが、そういうわけにもいかないのが、ホームページの情報を短時間で正確に把握するのに言語のハンディキャップは結構大きい。

2002年の場合は、受賞者にKOSIBAというローマ字つづりの名前があった。しかし、われわれとしては、小柴昌俊さんは取るべく人がやっと取ったという感じであったので、それほど驚きはなかった。ところがローマ字つづりのTANAKAさんは「一体誰なんだ」と、大騒ぎになった。インターネットの検索サイトで探してみたら、京都大学に同姓同名の方がいた。本物の田中さんはすぐには探し出せなかった。

受賞発表後、科学記者が最初にやらなければならないことは、新聞社のホームページに流す速報用の短い原稿を書く作業だ。次に号外用の原稿書き。いずれも、誰がどういう業績で受賞して、受賞者はどういう人なのかを最低限書く必要があるが、それほど時間はかけられない。長くても30分前後で書きあげなければならない。そうしないと新聞本紙の原稿を書くのが間に合わなくなるからだ。

新聞は、次々に締め切り時間がくる。東京だと、締め切り時間は3種類。新聞の一面の右肩に12、13というような数字がついているが、これは締め切りの早い順番に振ったものだ。一番早い締め切りは午後9時ごろ。次が午後11時ごろ、最後は次の日の午前1時ごろになっている。新聞原稿は、この締め切りごとに作業が間に合った分を書き足していけばいいわけではない。とりあえず、締め切り時間ごとに完成した原稿にしなくてはいけないのだ。修正すべきところがあれば、次の締め切りの時に直したり、時間の経過とともに分かってきたことを付け加えていくという書き方になる。ノーベル賞受賞に関しては、発表から最初の締め切りまで2時間くらいで本紙の完成原稿を書かなければならなかったのが、結構忙しい作業であった。

小柴さんには事前に何度も会ったこともあったし、周りにも知っている人がいて、それなりに略歴は用意してあった。また、ノーベル賞を取るかもしれないという予測から予定稿が作られていたし、写真も用意してあった。しかし、事前に準備したそのような原稿は、いざというときにそのまま使える

とは限らない。新聞記事は、その時の勢いが大切なので、原則として、前に作っておいた原稿をそのまま流すということはない。その時の状況にあった原稿にするために新たに書き直すので、時間的なゆとりがない。そのために、後で振り返ってみると、「もう少し考えれば、もっとよい記事ができたのに」ということがままある。新聞には、十分に時間をかけて磨き上げた完璧な原稿が載るといことは、まずない。

ノーベル賞のダブル受賞によって、2日続けて号外を出した。田中さんについては情報がなくて困ったが、号外を出すことが決まってしまうと記事を作らないわけにいかず、大慌てで作った。号外の紙面にそれが現われている。小柴さんは顔写真、略歴が載っていて事前に準備があったことがわかるが、一方の田中さんについては顔写真もなければ略歴もない。用意できなかったのだ。それだけではページが埋まらないので、これまでの受賞者の一覧表を載せるなど、苦勞の跡が見える。

原稿を書くときはノーベル財団のホームページだけを頼りにするのは

【写真】ダブル受賞を伝える号外

0120-000081 読者新聞 号外

**ノーベル物理学賞**

**小柴昌俊博士に**



**ニュートリノ天文学開拓**

日本人3年連続の受賞

米学者と共同で

小柴昌俊博士は、ニュートリノ天文学の開拓者として知られる。ニュートリノは、物質と相互作用が非常に弱く、宇宙から地球に到達するまでほとんど変化をしない。小柴博士は、ニュートリノの振動現象を理論的に説明し、観測装置の開発に貢献した。この発見は、ニュートリノの質量の存在を示唆し、素粒子物理学の重要な進展をもたらした。

0120-000081 読者新聞 号外

**ノーベル化学賞**

**田中耕一氏に**

**タンパク質構造の新分析法開発**

43歳日本人連日12人目の受賞

田中耕一氏は、タンパク質の構造解析に革新的な手法を開発した。従来のX線結晶解析よりも、より柔軟なタンパク質を解析できる。この手法は、タンパク質の機能と相互作用の理解に大きく貢献した。田中氏は、タンパク質の構造解析の分野で重要な発見をした。この発見は、タンパク質の構造解析の分野で重要な進展をもたらした。

これまでのノーベル日本人受賞者 昭和46年

年	受賞者	受賞分野	所属機関
1910	高木素五郎	物理学	東京大学
1914	湯川秀樹	物理学	京都大学
1927	湯川秀樹	物理学	京都大学
1931	湯川秀樹	物理学	京都大学
1937	湯川秀樹	物理学	京都大学
1949	湯川秀樹	物理学	京都大学
1954	湯川秀樹	物理学	京都大学
1958	湯川秀樹	物理学	京都大学
1961	湯川秀樹	物理学	京都大学
1962	湯川秀樹	物理学	京都大学
1969	湯川秀樹	物理学	京都大学
1974	湯川秀樹	物理学	京都大学
1982	湯川秀樹	物理学	京都大学
1985	湯川秀樹	物理学	京都大学
1994	湯川秀樹	物理学	京都大学
2000	湯川秀樹	物理学	京都大学
2002	湯川秀樹	物理学	京都大学
2008	湯川秀樹	物理学	京都大学
2015	湯川秀樹	物理学	京都大学

なく、いろいろなものを参考にしている。例えば、テレビニュースのインタビューでマイクを向けられたサラリーマンが「田中さんは、サラリーマンの希望の星ですよ」などと述べているのを聞くと、原稿を書く上でそういうトーンに影響されることもある。新聞の記事がテレビニュースと似てくるのは、こんな事情にも起因している。

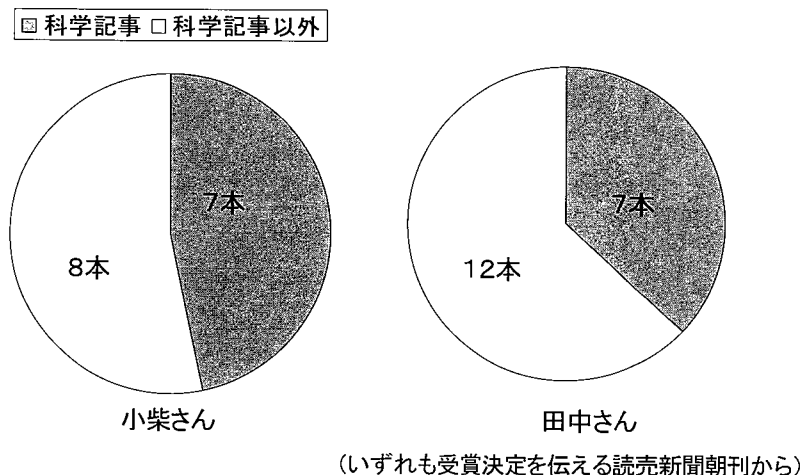
## 1.2. 新聞に載っている科学記事の割合

そもそも科学記事はどのくらい新聞に載っているのだろうか。科学記事とそうでない記事との区別は難しく、どうしても主観的にならざるをえない。例えば、小柴さんの業績を生んだ「カミオカンデ」という観測装置の部品を作った「浜松ホトニクス」はどのような会社かという記事は、科学記事なのかどうか。会社の概要だけなら科学記事ではないが、ノーベル賞受賞に寄与するほどの高い技術力を持っているという内容が入っていた場合、それが科学記事かどうかは主観に左右されてしまう。

それを承知のうえで見てほしいのだが、小柴さんと田中さんの受賞決定を伝える読売新聞の朝刊記事で、科学記事と科学記事以外の割合を示したものが【図表1】のグラフである。新聞記事の本数をどう数えるかも、単純なように思えて、実は難しい場合が多い。たとえば、2人の記者が原稿を書いて1本の見出しをつけた場合、これを1本と数えるか2本と数えるかなど、あいまいなところもある。したがってあくまでも、私の判断であるが、その結果、小柴さん関連の報道15本のうち7本が科学記事、科学記事以外は8本であった。科学記事は業績、カミオカンデとは何か、ニュートリノとは何かなどに関するもの、科学記事以外は、小柴さんの人柄、弟子の紹介と祝福の様子などの内容であった。同様に、田中さんに関する記事を区分けしてみると、19本のうち7本が科学記事、12本が科学記事以外で、科学記事以外ほうが多い。この傾向は、他社の新聞でも同様であった。

概して新聞の一面はノーベル賞を受賞したという事実を伝えるので、各社とも同様の紙面になり、各社の色がでてくるのは、社会面である。小柴さんに関する各社の社会面の記事は、「朗報に「ペリー・ナイス」」(読売新聞)、

【図表1】小柴さん・田中さんに関する記事の内訳



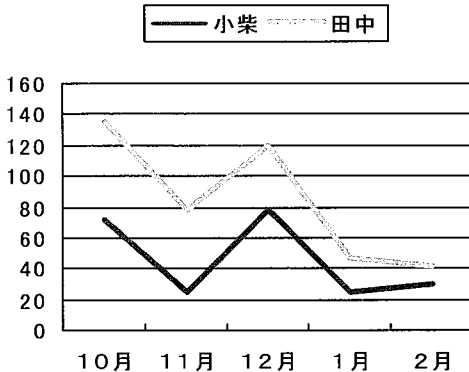
「タフな知性 挫折で磨き」(朝日新聞)、「名伯楽 満面に笑み」(毎日新聞)という具合で、全体的にみると知性がある、凡人ではない、偉い先生だという雰囲気の記事になっている。一方、田中さんに関する社会面では、「無名の会社員 一躍栄誉」(読売新聞)、「びっくり主任さん」(朝日新聞)、「一躍『世界の主任さん』」(毎日新聞)という見出しが踊り、田中さんはひょっとするとオレたちの仲間なんじゃないかという親近感と、ふだん隣の机に座っているかもしれない人がノーベル賞をもらったという驚きが表現されている。

### 1.3. 新聞は身近なものを取り上げるメディア

新聞は身近なニュースを大きく取り上げるメディアである。例えば米国と日本で同じようなことが起こった場合には、日本で起きたことを大きく扱う。日本人が読む新聞なので、日本での出来事がより身近だからだ。東京を拠点に新聞を作る全国紙では、例えば九州で起きた事件より東京で起きた事件をより大きく扱う。九州の地方紙であれば、もちろん逆になる。

田中さんの方が小柴さんより掲載記事の本数が多く、しかも科学以外の記事が多かったのは、田中さんが身近に感じられたからだ。【図表2】のグラフは、2002年10月から2003年の2月までに読売新聞に掲載された小柴さんと

【図表2】小柴さん・田中さんの記事本数の変化



田中さんの関連記事の本数を月ごとに表したものの。10月は受賞が発表された月、12月は受賞式が行われた月で、掲載記事が多かった。

掲載記事をこの期間でトータルすると田中さんが421本、小柴さんが229本で、小柴さんは田中さんの54%。圧倒的に田中さんに関連する記事が多く、小柴さん

の名前は田中さんの半分しか新聞に登場していない。それはなぜか。田中さんの場合には、無名の社員が一躍栄誉を受けたというドラマがあり、新聞が好きなキーワードがたくさんあるからだ。まず、43歳と若い。大学院を出ていないという点でも親近感を持つ人が増える。肩書きも当時は主任で、ごくありふれている。主任の肩書きを持つ人は、普通の会社の中にもたくさんいるはずだ。記者会見には作業着で出てきて、照れ笑いが魅力的に見える。新聞は写真がとても大事で、「絵になるか、ならないか」は重要なポイントになる。その点では、小柴さんより田中さんの照れ笑いの方がずっと絵になる。小柴さんは泰然としていたが、島津製作所では田中さんの受賞は晴天の霹靂であり、記者会見の設定からなにか大慌てでドタバタであった。それがかえって新鮮に映った。

田中さんの受賞は、テレビのワイドショーも巻き込んで、大騒ぎになった。一部には新聞までワイドショーにつき合ってどうするという声もあった。田中さんについての騒動はお祭騒ぎの色彩が強かったように感じた人が多いと思うが、実は、次に述べるように、まさに新聞の原則どおりの扱いであった。

#### 1.4. 「ひとを描く」のが新聞の原則

では、その新聞の原則とは何か。それは「人（ひと）を描け」ということにつける。私は入社後すぐに東北総局勤務となり、仙台で警察を取材しながら街の話を拾って県内版に記事を書くという仕事を始めた。

新聞社にはいろいろ情報提供があり、記者は割と積極的にそれらを取材する。そこで、新人がよく犯す間違いがある。例えば、珍しいバラが見事に咲いたという情報が入って取材をする。「何とかさんの家に見事なバラが咲いた、こんな見事に咲くバラは他にない、色が変わっている」などと、バラについて取材して一生懸命に書く。しかし、デスクから、その原稿は新聞には載せられないと言われる。「この原稿はバラの話ばかりではないか。新聞はバラではなく、人を書くんだ。だから、見事なバラを咲かせるために、何とかさんがどれだけ努力をしたのか、この人はどういう人なのか、何でバラを育てようとしたのか。肝心の育てた人のことが全然書かれていない。もう1回、やり直し」と言われ、取材し直すことになる。つまり、バラではなく、バラを育てた人について書くことが新聞の原則なのだ。そういうことを新人の時から刷り込まれてしまう。

つまり、ノーベル賞を受賞した田中さんに関していえば、田中さんが開発したタンパク質の分析の技法について書くのではなく、開発した田中さんについて書くことが新聞の原則なのだ。例えば、授賞式の後にダンスをするの？奥さんってどんな人？など、科学以外の素朴な疑問が記事になり、風貌やキャラクターが癒し系ということで写真もたくさん掲載される。そこには「科学」が入る余地はない。このように、新聞を多くの人に読まれるように原則どおりに書こうとすると、科学より科学をする人間の方が前面に出てくる。

今後、科学についての記事が増えていくのか、科学をする人についての記事が増えていくのかとなると、原則どおりにいった場合は、新聞では後者が増えやすい。科学は新聞になじみが悪い分野なのかもしれない。新聞は科学について本当に書けるのだろうか。「科学者の生き様を書いて下さい、その方が親しみが湧きますから」という読者の声は確かにある。それでは「新聞で



は科学者の生き様を書くので、そのぶん科学そのものの記事分量は削ります。だから、科学自体については他のメディアで読んでください。本もたくさん出ていますから」と言っているのだろうか。この問題は、新聞社でも解決はついていない。おそらく今後考えていかなければいけない問題なのだろう。

## 2. 科学記事はどのような過程を経て新聞に載るのか

### 2.1. ニュース面とフィーチャー面

科学記事の掲載場所は、ニュース面（フロントページや社会面など）とフィーチャー面（科学面、解説面、特集ページなど）の2つに大きく分けられ、場所によって記事の性格がちがってくる。

その具体例として、ニュース面に載った宮城県の地震記事（「読売新聞」2003年7月27日付朝刊）と、「エコロジー」（「読売新聞」2003年7月23日付夕刊）という科学面を見てみよう。科学部では毎週、朝・夕刊含めて3ページの特集を作っているが、そのうちのひとつ「エコロジー」は取材から紙面の構成まですべて科学部で行っている。科学以外にもいろいろな記事が載るニュース面は、どんな読者でも読んで分らなければならぬという制約を受けている。例に挙げた地震のニュースを掲載する時、「地震の破壊力示す指標 加速度史上最高」という見出しがしたが、このとき「加速度」という言葉を使っているのかどうか問題になった。自動車の加速度は分かる気がするが、地震の加速度といっても読者は分からないのではないかというのだ。地震の加速度という言葉が分からない読者が多かろうということになれば、加速度というものが何なのかを、当たらずとも遠からずの言葉で表現しなければならない。確かに加速度は力だが、それそのものが破壊力の指標なのか、本当はエネルギーとしての速度の方がいい指標になるのかなどと考えてはみたが、結局は、「加速度」を実感してもらう言い換えとして「破壊力」を見出しに入れ、「地震の破壊力示す指標 加速度史上最高」になった。加速度は破壊力とは違うだろうといわれても、どうしようもない。新聞は、読者に親しみがなさそうな言葉や事柄を記事にすると、何となく分

かった気にさせるような表現を盛り込む。新聞は、読者に理解不能を理由にそっぽを向かれない記事を強く志向するメディアなのだ。

## 2.2. 取材のきっかけ

取材のきっかけとなるのは、学会発表、論文誌、予算がらみ、記者発表、研究者から直接聞いた話、記者クラブで得る情報などである。それらの情報を記事にするかしないかは、おもしろいかどうか、書いておくべきかどうか、読者が理解できるかどうか、要するに新聞に載るものかどうかを取材記者が考え、判断する。取材をし、原稿を書き上げるまでは記者ひとりの作業になるので、記事になるかならないか、どのような記事になるかは、取材記者の力量、問題意識にかかっている。まさに、個人技、職人技の世界といっている。

### 取材のきっかけ

- |            |                         |
|------------|-------------------------|
| ・ 学会発表     | 「…を※※学会で発表する。」          |
| ・ 論文誌      | 「…を××日発行の「ネイチャー」で発表する。」 |
| ・ 予算がらみ    | 「※※研究所は来年度から…する方針を固めた。」 |
| ・ 記者発表     | 「…と発表した。」               |
| ・ 知り合いの研究者 | 「…が分かった。」               |
| ・ 記者クラブ    |                         |

## 2.3. タイミング

新聞はタイミングが大事である。

まず、研究の一連の流れの中で、どの段階で記事にするか。記事にするタイミングとしては、研究構想の段階、予算獲得の段階、成果は出てきたがまだ批判にさらしていない段階、学会発表の段階、論文公表の段階があり、記者は自分が書きたいと思ったものは、これららのあらゆるタイミングをとらえて書こうとする。

## 記事にするタイミングと記事の表現

- ・構想の段階／「…の構想をまとめた。」
- ・予算獲得の段階／「来年度から…に着手することを明らかにした。」
- ・批判にさらしていない段階／「…教授らの研究で分かった。」
- ・学会発表の段階／「…と××学会で発表した(する)。」
- ・論文公表の段階／「…と○日発行のネイチャーで発表する。」

しかし、記者が書いた原稿がすべてそのまま紙面に載るわけではない。必ずだれかのチェックが入る。その代表的な存在が各部のデスク。デスクがだめと判断したら載らない。科学部だけで作る紙面では、デスクが OK を出せば科学面には載る。しかし、ニュース面では、もうひとつの関門がある。それは編成部のチェックである。新聞社には政治部、経済部などいろいろな部があり、それぞれが同じ仕組みをもっていて、それぞれ自分の部の記事をニュース面に載せようとする。そこで編成部がニュースの軽重を判断して「載せる、載せない」を決定し、載せる記事については扱いの大きさを決めたくえで見出しをつける。

科学の研究成果は、昨日分かっていたいなかったものが、今日突然分かるということはない。だから、科学記事は基本的にはいつ新聞に載せても構わないものだ。逆に、例えば今日、バスの事故が起きたら、社会部ではその日の夕刊か翌日の朝刊に載せなければならない。ニュース面に載せる場合には、日付限定の記事が各部からたくさん出てくるので、いつ載っても構わないといっていると、いつになっても科学記事は載らないことになってしまう。そこで、たとえば学会発表なら、その日のうちに記事にして、本当は今日載せても明日載せても内容的には変わらないが、今日が良いタイミングだと編成部にアピールし、他の部に対抗している。

またニュース面では、社の幹部クラスの意向も入ってくる。幹部はその日その日でローテーションを組んでいるため、たまたまその日の担当が科学嫌いだと科学記事が載りにくいということもある。新聞というのは、常に統一した基準があるわけではなく、その日その日の状況に応じて記事の載り方にゆらぎがあるのだ。

このように、一般的には記者が書いた原稿がそのままの形で載ることはない。私も新聞記者を20年近くやっているが、全然手を入れられずに記事が紙面に載った記憶はない。多かれ少なかれ他人の手が入る。「こういう書き方もあるのか」と手を入れられたことに感謝する場合もあるし、逆に悪くなったと思う場合もある。手を入れるデスクがだれであるかによっても、記事の出来上がりはかなり違う。

また、科学部だけで作る紙面の場合はあらかじめ原稿量の調整ができ、その量に応じた書き方ができるが、ニュース面の場合、とかく原稿の分量が多すぎて削られる場合が多い。削るのが嫌なら明日の掲載にまわしてくれと編集部に言われる。このあいだ私が朝刊用のデスクをやっていた時も、若い記者がこっそり追いかけていた特ダネに他の社が感づいたらしいので早く載せた方がいいということになって、数多い記事の中に無理やり割り込ませるために90行ぐらいあった元の原稿を45行に縮めた。十分に説明が行き届いた記事とはいえないが、こうして無理に載せなければならない場合もある。このように、やむにやまれぬ事情で原稿に大幅に手を入れることもある。こういうことが記者にとってもデスクにとってもストレスになる。

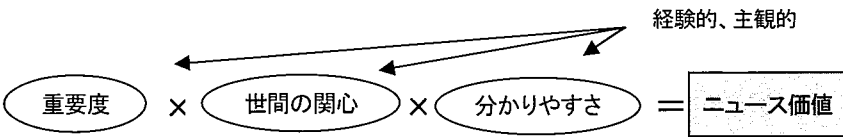
#### 2.4. ニュース価値のある記事

どんな記事が大きく載るのか。それは新聞にとってニュース価値の高いものである。自分の経験からいうと、〈重要度〉と〈世間の関心〉と〈分かりやすさ〉をかけ算し、この値が大きいとニュース価値が高い。ただ、例えば重要度はだれにとって重要なかが明確でなければあまり意味がないが、実は、それがあいまいである。しかしここでは、そのあいまいさを承知で話を進めることにする。

分かりやすく3つの例を挙げ、それを数値化してみた（【図表3】参照）。大地震の重要度は10、世間の関心は、自分のところで起きたらどんな被害がでるのだろうとみんなが思うので100、地震の分かりやすさは、どこでどのくらいの数の家が壊れたかという分かりやすい話が多いので10。これらをかけ算すると10000になる。

それに対して、ニュートリノの質量が発見されたニュースは人類史的に考えれば、とても大事なことであり、もしかしたら地震より重要度は高いかもしれない。そこで重要度は100と考える。しかし、世間の関心度は1。しかも、分かりやすさからいえば極めて分かりにくい。そこで、分かりやすさは1より小さい0.1。これでニュース価値は10ということになる。また、巨人軍の松井の大リーグ移籍は、多くの国民に影響が及ぶというわけでもない、重要度は1。しかし、世間的関心は高く30。そして圧倒的に分かりやすいという意味で、分かりやすさは100。これでニュース価値は3000になり、ニュートリノより松井の大リーグ入りのほうがニュース価値があることになる。

【図表3】ニュース価値



**大地震**

10                      100                      10                      10000

**ニュートリノ**

100(?)                      1                      0.1                      10

**松井 大リーグへ**

1                      30                      100                      3000

新聞はこんな大切なことをどうして書かないのか、あんなくだらないことをどうして書くのかという世間の人たちからの批判はよく聞く。多分に主観的なこの3つの例でも明らかのように、ニュース価値は、それを決める客観

的な基準があるわけではなく、記者個人、あるいはその日の紙面の責任を持つ幹部の経験や主観に大きく影響される。記者や新聞社の幹部は、自分に興味がない記事なら世間も興味を持たないし、新聞に載せても意味がないと思うものなのだ。

## 2.5. 科学部の新聞社内での存在

新聞社には社内勢力図がある。人間の利害や欲望をストレートに反映する政治部、経済部、社会部が書く記事は読まれることが多く、読まれる記事を書く部署は部員もたくさんいて、社内ではメジャーな部ということになる。編集局長はメジャーな部の出身者から選ばれることがほとんどだ。読売新聞の場合、科学部生え抜きで編集局長になった人はいない。

一般論として、科学部は人間社会の利害とは別の次元で科学的な事実を紹介するマイナーな部である。科学部よりもっと淡々とやっているのがスポーツ取材の運動部で、社内では別格の存在となっている。科学は大事だから、もっと掲載すべきだという声も聞こえるが、編成部でニュース面に載せる記事が選択されるとき、担当者が科学嫌いならば、科学関係の記事の優先順位が低くなっていく可能性もある。もっとも最近では、科学部もフィーチャー面だけではなくニュース面からむケースが多くなり、状況は変わってきている。

## 2.6. 科学記事の日米比較

科学記事の取り扱い方について、アメリカと比較してみよう。ニュートリノの質量が発見されたという記事は、夕刊の一面と二面に解説が載った。記事の字数をカウントすると約1670字だった。この成果はアメリカとの共同研究でもあるので、アメリカでも新聞記事になった。「ニューヨークタイムズ」の記事を邦訳してみると約4000字になり、読売の2倍以上の分量であった。4000字というと、日本の新聞では広告を除いた1ページ分に相当する分量である。学会の1コマで発表されたテーマで新聞1ページを埋めるということは、日本の新聞ではありえない。ニューヨークタイムズがうらやましいかぎ

りだが、日米の新聞には発行部数や読者層の違いがあり、単純に比較して日本の新聞を「情けない」と批判されても、いかんともしがたい。

科学好きの国民が少なく、科学が記事になりにくい日本の現状で、ニュートリノがニュースとして価値があると判断した読売新聞の決断は、評価に値すると思う。この記事は私が書いたものだが、一面に載せるにあたっては、いろいろテクニックを使った。研究者の発表は、そのままでは原稿にはできない。読者の目になじみやすいポイントはどこにあるのかを探し、読者が興味を持ってくれるように工夫して記事にした。さらに、一面に掲載するニュース価値のある記事を書いたのに、それを載せなかったならあなたの判断ミスですよと編成部の責任者に詰め寄ることもある。この時は、他社もこのニュートリノの質量の発見を夕刊一面に載せた。朝日新聞だけは社会面に小さく載せて、後から大あわてだったようだ。

## 2.7. 読者全員が分かる記事が要求される

日本の大手新聞の読者は多様である。読売新聞は1000万部発行し、多様な読者がいるわけだから、その中には科学に興味を持っている読者もいるはずで、少々難しい科学記事を載せてもその人たちに読んでもらえばいいではないかと思うかもしれないが、実際にはそういうことにはならない。新聞記事は、1000万人の大多数が分からなければならない、そういう記事を書かなければ載せられないのだ。科学部が分からない記事ばかりを書き続ければ、それが紙面に載ることも少なくなり、そうすれば科学部は人員削減したらどうかという意見も出かねない。最近では、さすがに新聞に科学はいらないという意見は減っている。しかし、現在科学面は週3ページあるが、それを削ってスポーツ記事を載せたほうが多くの読者のためになるという意見も出かねないということを、科学記者は念頭に置いておく必要がある。それが嫌なら読者みんなに分かるようなおもしろい記事を書くようにという有形無形のプレッシャーがかかる。

新聞に科学について書くのは、ただでさえつらい。記事1本の分量が少ないからだ。かなり長目の原稿でも1000字くらいだ。結構な分量だと思っても

しれないが、日付や研究者、研究機関の名などを書いていると、研究そのものの内容に割ける分量はそれほどでもない。だから、取材してみてもおもしろいことがたくさん出てきても、記事にするにあたっては、書きたいものをどれだけどうあきらめるかという作業が必要になる。科学記事を新聞に載せるということは、書きたいことをどんどんあきらめていくという作業の連続なのだ。

## 2.8. 分かりやすくするためにイラスト化

OECD の調査でも、日本人は科学に関心を持っていないという国際比較の結果が出ている。そこで、科学に関心を持っていない人にも、科学記事を読めるだけ読んでもらおうとすると、イラストを重視する紙面づくりになる。読売新聞の月曜日の夕刊に「快テク生活」という科学面があるが、ここでは大きな凝ったイラストを使っている。イラストのスペースを増やすと、当然のことながら原稿は短くせざるをえない。

昔は、原稿ですべてを語り、図は補助的に使うというのが、新聞記事の原則だった。このような紙面づくりだと、あとで記事だけをデータベースから取り出しても、それさえ読めば内容は分かった。しかし、イラスト重視の紙面では、本文はイラストとダブらない内容の記事程度にとどまり、記事を読んだだけでは内容を把握することは難しくなる。最近のデータベースはイラストも含めて読み込めるようになってきたが、テキストだけのデータベースだと内容すべてを伝えきれない。イラスト重視の紙面だと、読んで知りたいという読者は離れていくだろう。また読まなくても見てわかるという紙面づくり自体が、このページの特徴として目的になってしまうと、科学政策などイラストになじまないものは載せられなくなる。新聞の科学記事として必ずしもよい方向に向かっているとは思えないが、どの新聞も見れば読まなくても分かるという紙面作りの傾向が強まっている。



### 3. 科学者が考える科学と新聞が伝える科学の違い

#### 3.1. 科学者の価値観・普通の人々の価値観

科学者は、新聞はいい加減だと思っている。それは、科学者の価値観と普通の人々の価値観はまったく別ものだからだ。科学者と普通の人々の壁は厚い。科学者は、新聞記事は不正確だと批判する。専門用語をきちんと使い、論理的に説明するべきで、それを理解できないのはその人に責任があるという。しかし、普通の人々は論理的であることに、高い価値を見出していない。それをあえてやろうとすると、「理屈っぽい」ということになる。そこをなんとかするために、新聞は、論理があまり前面に出ないように工夫してかみくだいて書く。そこが科学者には受けが悪い。

#### 3.2. 記事にするタイミングに違和感を持つ科学者

また、科学者は新聞の記事に違和感を持っている。記事にするタイミングには、すでに述べたように、基本的に構想の段階、予算獲得の段階、批判にさらされていない段階、学会発表の段階、論文公表の段階がある。だから、レビューを経していない研究結果の段階で記事になるものもある。科学者と新聞記者は喧嘩をしたがっているわけではないが、こんな時、ぶつかることがある。科学者でも研究所の幹部クラスになると、記事になったことで文部科学省や財務省と余分な摩擦が生じると困ると言ってくる場合がある。記者の立場から言えば、そんな心配があるなら話さなければいいではないか、話したら即書かれる可能性が発生することを認識すべきだと思う。

科学者は、この先研究を続けていくと異なる結論になるかもしれないので、断定的に記事を書かないで欲しいのだけれど、記事は白黒をはっきり書かなければ読者は分からない。だから、「こうかもしれないし、こうでないかもしれない」という新聞記事は原則としてありえない。とりあえず、今こういうことが分かっていると書く。この先、別な結果が出てきたら、その特別な結果が出たと書く。このように、記者と科学者との考え方がちがう。

- ・(科学者)「ただ、その研究者がそう思っているだけでしょ」(レビュー前)
    - (新聞記者)「多数意見じゃなきゃ、マズインですか」
      - 「私たちは真偽の判定機関じゃありません」
  - ・(科学者)「まだ予算がついていないんですから」
    - (新聞記者)「予算がついたなんて、書いてませんよ」
      - 「研究所がこういう構想を持っている、と書いてだけです」
- そのほかにも……
- ・(科学者)「そんなこと書いちゃ、科学のイメージダウンだ」
    - (新聞記者)「科学のイメージアップのために働いているのではありません」
  - ・(科学者)「そんなにはっきり分かったとは、言わなかつたらう」
    - (新聞記者)「白黒はっきり書かなきゃ、読者は理解できませんよ」

Selling Science という本によると、科学者が新聞記事は不正確であると考えるのは、事実誤認というわけではなく、定量的な表現を省略した場合が多いのだそうだ。科学者は、自分と同レベルの知識のある同僚が記事を読むと思っている。しかし記者は科学者のサークル紙を作っているわけではないので、一般人が読んだ時、どれぐらい分かるかということを考える。

Selling Science はまた、科学者と新聞との緊張関係の最大の原因とは、科学者の新聞の捉え方にあるという。科学者は科学を人々にわかりやすく伝えるのが新聞の役目だと思っている。そして、科学を生み出しているのは科学者で、その情報をコントロールする主体も科学者だとも思っている。そこで、新聞は科学の進歩のために良いイメージを伝え、悪いことは書かないで欲しいということになる。

結局、科学者は、新聞は自分たちの広報紙のようなものだと思い込んでいる。だが、新聞の場合、広報紙のように、どの成果をいつどのように伝えるかを研究者が決めることは必ずしもできない。その情報を記事にして出すかどうかは記者が決めることなのだ。

例えば、常温核融合について、「こんないい加減なものは新聞でとりあげる必要はない」という科学者がいた。新聞記者である私には、こんなおもしろいテーマはない。肯定、否定、さまざまな意見があり、また今後、どのような方向に向かうか予断を許さない。こういう不確かなテーマの載せ方、書き

方はケースバイケースだ。きちんとした正当性が評価されたものだけが記事になるのではない。

### 3.3. 記者側の問題点

記者側にも問題点はある。文系出身の人間に科学記者は務まるかと聞かれることがある。しかし、記者は自分で科学研究をしている訳ではないし、素人の方が客観的にものが見えて良い点もある。記者はいつも何か書かなくてはと思っている。だが、気持ちはあっても、関心を引くおもしろいテーマがないことも多い。そこで、自分ではおもしろくないと思いながら書いてしまうことはある。また、原稿の締め切り時刻が迫っているため、吟味が不十分なままで書いてしまうこともままある。これらが、記者の側の問題点と言えるだろう

科学記者は、科学者を仲間だとは思っていない。だから、科学者が、なぜ科学を自分たちのルールに従って伝えてくれないかという問いを科学記者に投げかけること自体、そもそもおかしいのだ。新聞記者は科学者の成功に拍手をしたりしない。高校野球の時、泣いている高校球児の傍でもらい泣きしているレポーターがいるが、あれはプロとしては失格なのだ。レポーターがやらなければいけないことは、彼の左目と右目のどちらから何滴の涙が出ているのかを見て、メモをとることだ。

ホワイトハウスのある報道官が「彼（記者）を友人だと思うと必ず裏切られる。だが、新聞記者として扱えば、必ず良い友人になれる」と言った。新聞記者は使い度があるとやっているのか、節度をわきまえれば人間としてなかなかいいやつだと言っているのか分からないが、新聞記者はどんな人間かという一つの真理を言い当てている。

今まで述べてきたことは、私の主観だとことわりを入れているが、この先いつまでもそれではいけないと思っている。自らの言及する内容に客観性や正当性を持たせるようにしていかなければ、科学ジャーナリズムは発展しない。悪しき現場主義を廃し、日本における科学ジャーナリズムを成熟させていくためにも、その点に留意していきたいと思う。

これまで話してきたように、新聞の中で科学記事は決して優遇されているわけではない。新聞は人間を描くのが原則なので、その原則を遵守するならば、科学記事がこれまで以上にたくさん掲載されるようになるのは難しい。新聞に科学記事を載せるためには、新聞の原則に逆らう覚悟が必要になる。しかし、果たして科学記者にそれができるのだろうか。その力量と根性が科学記者にあるのだろうか。また、たとえ科学記事が新聞に載ったとしても、それは科学者が望む内容とはずれるのが普通だということも、知っておいてほしい点だ。これらの指摘をふまえた上で、新聞の科学記事についての論議が深まることを期待している。

### <質疑応答>

—— 科学記者とサイエンスジャーナリストとサイエンスライターは、どのよう  
にちがうのか。

**保坂** 正確には、区分けされていないのではないかと思う。あえて違いを言えば、ジャーナリストは常に批判的視点を持ち、サイエンスライターは科学の楽しさを批判を混じえず伝えることもある人で、科学記者はジャーナリストとサイエンスライターの両方を持ち合わせていて、新聞社や放送会社の報道局に雇われて仕事をしている人と言える。

—— ある偉い科学者が、取材に来た新聞記者に「勉強してからまた来い」と言ったという話を聞いたことがあるが、新聞記者は科学のことを勉強しているのか。

**保坂** 新聞記者の再教育はできればやりたいが、難しい面がある。一般的に新聞記者は記事を多く書くのがいい記者だといわれている。そして数多く記事を書く記者は、科学そのものについてはあまり勉強する時間などないというのが実状で、しかもそういう記者が出世していく。今後は、書く本数を減らしても勉強したい記者に対して、社内的にどのような仕組

みを作るかが問題になるだろう。科学部は、すでに出世とはあまり関係のない部署だから、自分の書きたいものを満足するように書くという人が比較的多い。

- 同じ事柄について日米で科学記事の分量に違いがあり、アメリカの方が記事の分量が多いということだったが、どういう記述について分量が多いのだろうか。また、新聞で科学を分かりやすく大衆に伝えられるというのは科学者の思いこみで間違っているというが、そうだとしたら科学者は何を提供できるのだろうか。さらに、論理的であることは新聞には有害だと言われたが、科学はまさに論理そのものだから新聞記事に適さないということであれば、科学記事は意味があるのか。

**保坂** 事実に関しては日米でもほとんど同じ分量になっている。分量が違うのは、アメリカの新聞では、背景に関して書かれており、専門用語の言葉の説明がていねいになっている。科学者の思い込みに関しては、新聞を科学者たちの広報紙のように期待しているが、新聞はそういうものではないということを述べたのであって、新聞は大衆に分かりやすく伝えていくメディアであることはまちがいない。論理性は大事だが、世の中では新聞に論理的なことは要求していないで、結論がどうかを求める。そういう考えている人が多い。日本では論理を重ねることで、納得できたという読者は少ない。

- アメリカの新聞と日本の新聞の違いということか。アメリカの新聞であれば、私たち科学者が望むような記事が期待できるのか。

**保坂** そういえるのかかもしれない。日本の新聞はどれも同じようなものだ。日米では購読者がちがう。文章を中心に構成する「ニューヨークタイムズ」と写真やイラストなどを豊富に載せる「USA TODAY」の読者ははっきり違う。日本の大手一般新聞は、この両方の読者を一緒にしているようなものなので、そのために科学記事の扱いが少なくなっている。これは日本の一般紙に科学を載せることの限界と言えるだろう。読売新聞も1000万部ではなくて200万部ぐらいの発行部数になれば、科学記

事の扱いも変わってくるかもしれない。

- 火星に生物がいるということを NASA が発表し、日本の新聞でも大きく載った。しかし、その後、否定的な記事も出た。すでに報道したニュースが否定された場合、新聞ではどのように扱うのか。

**保坂** この件では初報を否定する続報を出した。事が推移していく場合、その都度、軌道修正していく。一般的には大きな事件や事柄であれば続報することがあるが、初報より小さな記事になるのが普通だ。それほど大きな事件や事柄でなければ続報は出ない。続報が出る場合は、1人の記者が興味を持って追っかけている場合であって、そうでなければ続報は出にくい。

- 科学の分野で、流行り廃りがあるのか。それは記事掲載と関係があるのか。

**保坂** それはあると思う。例えば研究費のつき方などに関係しているのではないだろうか。新聞は感覚的に、世間の意識がこういうところにあるのではないかと想定する。具体的には、編成部が記事をセレクトして載せる時に、流行りのテーマだと載せやすくなる。